

創立20周年記念事業として、道工房が銀座京橋で展覧会を開催します。

日頃より、NPO 法人道の活動にご協力賜り、心より厚く御礼申し上げます。

新型コロナウイルスの猛威もようやく収まる様相をみせつつありますが、皆様ご無事でお過ごしのことと存じます。

平成14年に扇ガ谷の木造アパートに精神障害者地域作業所 倶楽部「道」を立ち上げてから、この4月1日で20周年を迎えました。最初の2年間は無収入で全てボランティア、ゼロと言うより正にマイナスからのスタートでしたが、数え切れない程の多くの方々のあたたかいご支援をいただき年々充実した活動を重ね、何とか続けて参ることができました。

常に頭にあるのは、通信3号でも10周年の際(10号)でも引用した亀井勝一郎氏の「邂逅の謝念」という言葉です。

「たとい安定したようにみえても、常に不安定なものが前方にあらわれてくる。その不安定なものに耐えて、それを切り抜けて行く勇氣そのものが幸福だと感じるためには邂逅の謝念が前提となっていなければならぬ」

20年間を思えば、困難かつ不安定な状況ばかりでしたが、その時々それを乗り越える必要な力を与えてくれたのが、その時その時でまさに必要であった「邂逅」であり、それへの「謝念」でした。特に20名を超える物故支援者に思う「邂逅の謝念」は今も前へ進む原動力となっています。

さて、この節目となる年に、アートの発信地である銀座京橋の「アートスペース羅針盤」で、秋に「道工房展」を開催することになりました。昨年提出した企画書が「日本郵便年賀寄付金配分事業」に採用され、費用の一部助成を受けて最大4年間行うことができます。その企画書に記した最終年次成果目標は「障害者アートが何ら特別なものではなく『オールブリュット』や『障害者アート』などというレッテル無く愛好してくれる人が増えること」としました。道工房のアートが、会場を訪れる一人でも多くの人の情緒に訴えることができることができるならば、それは大変嬉しいことだと思います。

アートは年齢、性別、国籍、時代、そして障害の有無を超えた普遍性があります。話すことが得意でなくてもアートがコミュニケーションの仲介をしてくれます。利用者同士は勿論ですが、支援者、商店会、地域のいろいろな団体とコミュニケーションできるツールになっています。今年度の実現目標の一つは、道工房のアートを海外へ発信をしていくことです。国外の人にも道工房のアートを知ってもらいたいと思っています。皆様にもぜひ道ギャラリーに足をお運びいただければ幸いです。

(岩立)